

いずみさの昔と今 第288回

「泉佐野の画家―向井久万と仏画―」

前回に引き続き、12月22日(日)まで開催中の秋季特別展「向井久万仏画展」に関連して、泉佐野出身の画家、向井久万と仏画について紹介します。

他の画家たちとの交流によつてか、それとも旧態依然とした官展（政府主催の美術展覧会）からの脱却による解放を目指したのかは判然としませんが、創造美術結成の昭和23（1948）年以後、久万は裸婦という洋画的テーマで積極的に制作に取り組みました。ある作品は写実的に描かれ、またある作品は大胆にデフォルメされ、そしてまたある作品はモノクロームで女性のふくよかさや肉体美が表現されています。裸婦をモチーフに置きながら、久万は様々な表現方法に挑んだのです。

久万が所属した創造美術は昭和26（1951）年に洋画団体である新制作派協会と合流し新制作協会日本画部を経て、昭和49（1974）年に創画会となりました。一方で

久万は「立像（りゆうぞう）」

（昭和26年）といった裸婦画とも仏画ともとれる作品を制作し始めます。「瑠璃光」（昭和39年）は「立像」のように人物を黒で表現し、脇には金剛杵（こんごうしよ）や三鈷劍（さんこけん）をはじめとした密教法具が描かれています。一見、仏画に見えますがその裸体はふくよかな体つきをしており、女体を連想させます。「ものみな虚空（むなしく）」（昭和41年）や「倣相（ほうそう）」（昭和44年）は一樣に裸体であります、人物の配置やポーズからは仏画を連想させます。ここから久万の新たな表現方法の挑戦や曲折とした心情、さらに制作のモチーフが裸婦から徐々に仏画の方へ傾斜していることがうかがえます。その後「半跏（はんか）」（昭和45年）を第34回新制作協会展にて発表した後、清明で至純さの漂う、明るい色づかいを基調とした仏画の制作に傾注していきま

した。

久万は戦時中であっても絵を描き続け、「人体を描く」というテーマで生涯を通して追求し続けました。はじめは裸婦像をモチーフに追求し、そこで培われた確かな技術と感性が仏画へと帰結させたのでしよう。そしてその飽くなき探求心は衰えることがなく、昭和62（1987）年、72歳で没する直前まで制作を続けました。泉佐野が生んだ日本画家、向井久万は、現在もその作品を通して私たちに「人体を描く」というテーマを示し続けています。



▶立像 (当館蔵)

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日 月曜日、祝日（祝日が月曜日の場合は月曜日と火曜日が休館）
開館時間
午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
入館料 無料

日本遺産・中世日根荘を巡る⑤ ～絵図編（4）「総福寺天満宮」～

「日本遺産」に認定された「旅引付と二枚の絵図が伝えるまち―中世日根荘の風景―」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介します。

問合せ先 文化財保護課



◀日根野村絵図に記された「禪林寺」

総福寺天満宮



総福寺（そうふくじ）は、約800年前に描かれた「日根野村絵図」の「禪林寺」の場所と推定されています。天満宮は総福寺の境内社で、大井関社別当慈眼院が造営に関与し、慈眼院に残る棟札の写しから天正4（1576）年に創建と判明しています。九条政基の「旅引付」にも「天満宮」「天神社」と書かれ、「御湯立」の行事についての記述も見られます。神社合祀されず、堂も存続したため、比較的旧来の景観が残されており、敷地周囲を井川（ゆかわ）の支流が通ります。

総福寺は曹洞宗（禅宗）で、歴代住職の無縫塔（禅宗の墓）や一石五輪塔（1519年）が天満宮の横に並びます。元々奈良時代に行基が開き、自作の十一面観音を本尊とするが、後に菅原道真が法華経や書を奉納し厚く信仰したという伝承があり、天満宮は道真公を偲んで建てたと言われていました。天正年間（安土桃山時代）の織田信長の紀州雑賀攻めの際に総福寺は消失、江戸元禄期（1688～1703年）に曹洞宗の雲山和尚が復興しました。

※絵図の写真は、歴史館いずみさの所蔵の複製を使用（原本は宮内庁書陵部所蔵）